

修士論文（要旨）

2009年7月

日英バイリンガルの言語意識に関する事例研究
- 越境に着目して -

指導 宮副ウォン裕子 教授

国際学研究科
言語教育専攻
20541419
小泉聡子

目次

本論文における用語の定義	a
第1章 はじめに	1
1.1 研究の背景	1
1.2 研究の目的	2
1.3 先行研究概観	3
1.4 用語の定義	6
第2章 調査概要と分析方法	11
2.1 調査概要	11
2.2 分析方法	15
第3章 BF1の事例	19
3.1 越境とカテゴリーの変化	19
3.2 日本語と英語の位置	23
3.3 「自分は普通の外人じゃない」	25
第4章 BF2の事例	30
4.1 越境とカテゴリーの変化	30
4.2 日本語と英語の位置	33
4.3 「自分は Japanese-American」	38
第5章 BF3の事例	42
5.1 越境とカテゴリーの変化	42
5.2 日本語と英語の位置	46
5.3 “Japinglish is me and I am Japinglish”	52
第6章 総合的考察	56
6.1 カテゴリーと力関係の発生	56
6.2 言語意識と言語の役割	57
6.3 バイリンガルの言語意識とアイデンティティ	59
第7章 まとめと今後の課題	62
7.1 結論	62
7.2 今後の課題	63
謝辞	
参考文献	
巻末資料	

要旨

キーワード：成人バイリンガル、越境、言語意識、情意、アイデンティティ

本研究は、移動する成人バイリンガルのカテゴリーの変化を糸口に、バイリンガルの言語の選択と使用から言語意識とアイデンティティの関係を論じるものである。カテゴリーとは、調査協力者の可変的な属性のことであり、言語意識とは、ある言語とその話者をどのようにとらえるかという個人の認識のことである。研究の目的は、1) 越境は日英バイリンガルのカテゴリーの変化にどのような影響を与えるのか、2) カテゴリーと言語の変化により、日英バイリンガルはどのような言語意識を持つのか、3) 越境経験によって培われた日英バイリンガルの言語意識は、アイデンティティにどのように関係しているのか、という3点を明らかにすることである。本論では、バイリンガルの言語能力ではなく言語にまつわる意識、さらに言語を通じた社会とのかかわりに注目し、分析と考察を行う。

本論は全7章からなる。第1章では研究の背景や先行研究を紹介し、用語の定義を行う。第2章では調査概要と分析方法を提示する。第3章から第5章では調査協力者3名の事例を記述し、分析・考察する。第6章で3つの事例に基づく総合的考察を行い、第7章で本研究の結論と今後の課題を述べる。

調査は、3名の日本語と英語のバイリンガルに依頼した。非構造化インタビューと半構造化インタビュー（村岡2002）を行い、言語にまつわるエピソードを語ってもらった。そこで得られたデータを文字化し、分析の対象とした。また、日本語能力に対する認識は言語意識に反映されている可能性が高いと考えられたため、インタビュー終了後に自己評価を依頼した。分析の理論的枠組みには、言語使用者がインターアクションの際に発生する話者間の力関係にアイデンティティを利用し対応しているとするNorton（2000）を援用する。これに拠れば、言語使用を通して表出されるアイデンティティやそこに反映されていると考えられる言語意識を把握することも可能である。本研究では、言語使用には言語意識が反映されており、言語意識とバイリンガルのアイデンティティには密接な関係があると仮定し、この理論による分析を試みる。分析方法には、インタビューデータに繰り返し現れる事象に着目し、それを分析の対象とする箕浦（1999）の手法を用い、バイリンガルの①越境経験、②言語、③アイデンティティについて記述と分析、考察を行う。

データの考察からは、研究目的に対するいくつかの結論が得られた。1) 越境は調査協力者の使用言語に変化をもたらす。また、越境に伴い、調査協力者は第三者から多様なカテゴリーを付与される。カテゴリーの付与は力関係を発生させるが、同時に、調査協力者のカテゴリーに対する意識化を促すきっかけともなる。2) 調査協力者はカテゴリーの意識化を通して自身の持つ言語を意識化する。言語意識は、言語が意識化されることで形成されるが、それには言語能力だけでなく調査協力者の言語にまつわる私的経験が色濃く反映されており、ゆえに言語意識は実用的側面と情意的側面から構成されていると考えられる。また、多言語・多文化との豊富な接触により、言語意識には多様性や差異に対する寛容さや柔軟さが加味される可能性がある。3) 多言語接触によって培われた寛容な言語意識は、調査協力者の言語使用に反映され、調査協力者は言語を自身のアイデンティティの根拠の1つととらえている。すなわち、言語意識はアイデンティティ形成に大きな影響を与えるものであり、調査協力者のアイデンティティは、複数の言語や文化を自由に行き来できる複合的で可変的なものであると考えられる。そのほかにも、インタビューデータの記述と分析からは、二言語接触によって生まれたバイリンガル特有の新しい言語の存在や、それらを含む複数の言語でなされるバイリンガルの言語の社会化の様子が明らかになった。

本論では、流動的な現代社会をユニークな言語使用とアイデンティティによってしなやかに生きるバイリンガルの姿が記述されたが、それはあくまでも3名の事例研究にすぎない。今後、より多くのバイ

リンガルについて調査を行う必要がある。また、分析からは、言語環境や人的ネットワークがバイリンガルの言語意識を大きく左右する可能性が明らかになったため、自らの意思で越境を選択する年齢になった3名の調査協力者の追跡調査を行うこと、そして本研究では十分な検証がなされなかった言語意識とアイデンティティの相互作用について明らかにすることも今後の重要な課題である。同時に、個人と言語の関係を能力だけでなく使用の観点から、より社会的にとらえる複言語主義の理論に基づく研究もなされる必要があると考えられる。多言語話者の言語意識やアイデンティティについて追究することは、言語を通じた個人の社会とのかかわりをより多角的に理解するために有用であると思われるが、それらについて、より理論的で汎用性の高い分析枠組みの提案が期待される。

参考文献

- 浅井亜紀子 (2006) 『異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ』 ミネルヴァ書房.
- 奥村みさ他 (2006) 『多民族社会の言語政治学 - 英語をモノにしたシンガポール人のゆらぐアイデンティティ』 ひつじ書房.
- 小野原信善・大原始子 (2004) 『ことばとアイデンティティ ことばの選択と使用を通して見る現代人の自分探し』 三元社.
- 金英実 (2009) 「中朝バイリンガルの言語意識についての事例研究」 『多文化接触場面の言語行動と言語管理 - 接触場面の言語管理研究 vol. 7 - 千葉大学大学院人文社会科学研究所プロジェクト報告書 (218)』 千葉大学大学院人文社会科学研究所. 33-42.
- 高民定 (2003) 「接触場面におけるカテゴリー化と権力」 宮崎里司、ヘレン・マリオット編 (2003) 『接触場面と日本語教育 ネットワークのインパクト』 明治書院. 59-68.
- 林さと子他 (2006) 『ことばを学ぶ一人ひとりを理解する第二言語学習と個別性』 春風社.
- 原千亜 (2008) 『在日ミャンマー人の接触場面における社会文化管理 - 言語の社会化の事例 -』 桜美林大学大学院国際学研究所修士論文.
- 福島青史 (2008) 「日本の多言語状況と「複言語主義」 - 来日ウズベキスタン人の多言語能力と使用領域調査から -」 『早稲田大学日本語教育学 第2号』 早稲田大学大学院日本語教育研究科・早稲田大学日本語教育研究センター. 29-44.
- バーカー、コリン (1996) 『バイリンガル教育と第二言語習得』 大修館書店 (岡秀夫訳・編) .
- マーフィ重松、スティーヴン (2002) 『アメリカンの子供たち - 知られざるマイノリティ問題 -』 集英社 (坂井純子訳) .
- 南川文里 (2007) 「二つのジャパニーズ - 移動とエスニシティの現代社会論に向けて -」 米山裕・河原典史編 『日系人の経験と国際移動 在外日本人・移民の近現代史』 人文書院. 27-49.
- 箕浦康子 (1999) 『フィールドワークの技法と実際 - マイクロエスノグラフィー入門』 ミネルヴァ書房.
- 宮副ウォン裕子 (2004) 「教室内と教室外の活動をどう結ぶか - 香港の経験から -」 『2004年日本語教育国際大会予稿集本冊』. 10-15.
- 八木真奈美 (2006) 「多言語使用と感情という観点からみる、ある『誤用』」 『WEB版リテラシーズ 第3巻2号』 くらしお出版. 1-9. <http://literacies.9640.jp/dat/Litera3-2-1.pdf>
- 八島智子 (2004) 『外国語コミュニケーションの情意と動機 - 研究と教育の視点 -』 関西大学出版部.
- Davies, A. (2003). Preface. In Davies, A. *The Native Speaker: Myth and Reality*. Multilingual Matters, Clevedon. vi-x.
- Kanno, Y. (2003). *Negotiating Bilingual and Bicultural identities, Japanese Returnees Betwixt Two Worlds*, Lawrence Erlbaum, Mahwah.
- Myers-Scotton, C. (2006). *Multiple Voices: An Introduction to Bilingualism*, Blackwell Publishing, Oxford.
- Norton, B. (2000). *Identity and Language Learning: Gender, Ethnicity and Educational Change*, Longman, New York.
- Rampton, B. (2007). Language crossing, Ethnicity and Socialization. In Li, W (ed.) *The Bilingualism Reader (Second Edition)*, Routledge, New York. 177-202.